

演奏会評 那須田務氏

『音楽の友』2014年3月号 p.161

第11回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

オラトリオ《サウル》全曲公演

第11回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン《サウル》

H F J 第11回公演は、旧約聖書に材を採ったオラトリオ《サウル》。ヒックスの最新校訂譜による本邦初演である。指揮は三澤寿喜。ピリオド楽器によるキャノンズ・コンサート室内合唱団&管弦楽団は、冒頭から表現が纏まっていて壮麗壮大。8人のソリストも様式に適う。とりわけ野々下由香里のミカルが出色。独唱やタヴィデ(辻裕久)とのデュオ(52番)など聴かせる場面がたくさんあり、牧野正人は偽善に満ち、悪感情に捕われたサウル王を好演。ハーブやオルガン、カリヨン(チェレスタで代用)など器楽が愉しいが、通奏低音楽器の選択にも説得力がある。とはいえ、やはり当公演を成功に導いたのは三澤の指揮。一音、一箇所たりともおろそかにしない作品に対する誠実な態度が感じられる指揮ぶり、全曲の構成を見通しつつ、きめ細かな緻密な表現で作品の美を表現し尽くし、長時間上演があっという間に感じられた。(1月13日・浜離宮朝日ホール)

〈那須田務〉